

貴公子のように見える鹿島田浩二にも、挫折の時期と、努力にもがく時期がある。その時期を乗り越えていくとき、エリートとしての飛躍がある。大学に入ってから動機付けを失いながらも、長期北欧遠征を財産に、日本のトップに立つ、そして経験する様々な挫折と再生。

## 長期遠征

大学進学直後、必ずしもオリエンテーリングに素直に取り組めたわけではない。オリエンテーリングの魅力が色あせて、妙に野暮で泥臭く感じた。インカレ中心主義の学生OL界の雰囲気にも違和感を覚え、初めの頃は心から溶け込めなかった。オリエンテーリングに限らずすべてが中途半端な時期が1年以上続いた。

モチベーションのスランプから目覚めたのは、大学2年時ユニバーシアード(ラトビア)での悲惨なレースと、それに続く1991年のスウェーデンでの長期遠征であった。

長期遠征のきっかけは、ラトビアから帰国するときにたまたま空港で居合わせたスウェーデン女子コーチのヨラン・アンダーソンとの会話である。ユニバーで挫折を感じ、強くなりたいと真剣に思っていた時、「北欧でのトレーニングは君達が望めばできることだ」という彼の軽い言葉を、チームメイトの中村弘太郎(京大OB、現みちの会)とともに真に受けてしまった。

結局ヨランの助けは得られず紆余曲折あったが、国沢五月を含めた3人で遠征を決意し、スウェーデンのセレン・ヨンソン氏の助力もあって、翌年の5月から5ヶ月間、スウェーデンを中心とした欧州遠征が実現する。



1995年3月の全日本大会。村越を抑えついに日本の頂点に立つ鹿島田浩二

遠征中は各地のクラブハウスなどを転々とし、その地方のクラブトレーニング、合宿などに参加した。ピラミッドの頂点であるトップ選手だけでなく、厚い層を支える地域クラブレベルの選手と接することで、スウェーデンがOL大国たる所以を知ることができる。国内ランキング100位にも登らない選手の強さやジュニア選手の真剣な取り組みから学ぶことは大きかった。

また余談だが、スウェーデンでの滞在を通じ、オリエンテーリングに限らず新しい価値観・人生観を多感な時期に学ぶことが出来たのは大きな収穫である。

決して豪華ではないが広くて清潔な家に住み、仕事が終われば、皆で近くの湖に行き釣りとバーベキューを楽しむ。北欧人のライフスタイルは日本人のそれとは全く異質である。もちろん夏の北欧という一番よい季節の一面しか見ていないのだが、人生にとって何が本当に幸せなのか、バブル末期で浮いていた日本と比較してみると、豊かさの本当の意味を考えざるを得なかった。

その価値観は今の自分も影響を受けている。企業人としての今も、自分のライフスタイルを見つめ直す目をもち続けられるのは当時の記憶があるからだと感じる。

## 1991年の可能性

1991年は世界選手権の初出場がかない、スウェーデンからそのまま開催地のチェコスロバキアに遠征した。全てが新しい経験でその後の可能性を感じる大会だった。ショートやクラシックではミスをしながらもスウェーデン、ロシア、デンマークの選手などと並走した。またリレーでもフランス、ポーランドの選手などに競り勝ち、自分の可能性を感じることができた。北欧での修行は自分の体感以上に実力を押し上げてくれた。

長期遠征からの12年間、波こそあれオリエンテーリングへの情熱が冷めてしまうことはなかった。たった5ヶ月の投資によって今も情熱が維持できていると考えれば、対費用効果の高い遠征だったと思う。

## 国内での

### トレーニングと村越の壁

帰国してからは、主に走力の向上を重視し、トレーニング方法を模索した。1991年から90年代半ばは様々なトレーニングを試みながら体力的にも選手としても成長したとを感じる時期だ。この頃幸運だったのは、優秀なトレーニングパートナーに恵まれたことである。大学時代は一つ後輩の鈴木卓弥、山本英勝（共に東大OB）そして院生時代からは現在も渋谷で共に走る加賀屋博文（筑波大 OB 渋谷で走る会）である。

富士登山競争、奥武蔵駅伝 1 区（10km）、5000m タイムトライアル、様々な種目で記録を狙い、自分のトレーニング成果を確認するのが面白い時期だった。実際陸上の自己記録はほとんどが1994年～97年、つまり24歳～27歳の時に出したものである。

一方オリエンテーリングでは1991年のOC大会で村越さんに初勝利して以来、「村越 vs 鹿島田」という図式が世間では作られていた。10年以上空席だった村越氏のライバルの座を埋めるものとして期待されたのだろうが、実際の実力はまだまだ開きがあった。1994年頃からは実力差は縮まったが、OLの完成度はどうしても及ばなかった。世界選手権では頼もしい同朋である村越氏も、国内ではどうしても超えられない壁であり、悔しさから何かを学ぼうと必至になった師匠でもあった。

### 世界の壁

体力的だけでなく技術面でも厚みが増し、競技力の向上してきたことを自覚した95年にWOCドイツ大会を迎える。新しく変更されたレギュレーション（注：1993年までは、クラシックは予選なし、ショートは5ヒート各上位10名までであったが、1995年からクラシックは2ヒート各上位30名、ショート4ヒート各上位15名に変更）に対して、それまでの経験から、予選通過はあたりまえくらいのつもりで望んだ。

しかし、世界のレベルは甘くはない。旧東諸国の分裂もあり、世界の選手層は年々厚くなる。結果はクラシック、ショートとも予選落ち。さらに充実して望んだはずの1997年ノルウェーでも、2種目ともボーダまであと少しでことごとく予選落ちした。全く課題の異なる2つのWOCであるが、自分の世界での実力はまさに予選ボーダラインのぎりぎり下にいることを示している。村越氏は

ノルウェーでショートクラシカルとともに予選通過を果たしており、国内で感じた村越の壁と同じものが世界では予選通過という壁で存在していたのだった。

### スコットランドの失敗

1995年、1997年ともに、確かにミスより防げば予選通過は可能であった。しかし、仮にそれで予選通過したとしても、ファイナリストの中ではもっともスピードが遅く、ミスの少ない部類の選手になってしまう。予選通過する選手はもっと速いスピードで、細かなミスを重ねながら通過している。自分に必要なのは、よりミスをしないう完璧なレースをすることよりも、多少ミスも犯しても予選通過できるスピードを身につけることだ感じていた。これは村越氏が究極の美しいレースをして1997年に達成した方法とは異なる、新しいアプローチでもある。

1999年スコットランド大会は、上記目標を持ってトレーニングに励んだ。1995年、1997年の準備を上回るトレーニングをこなし、よりタフに走れるようになることが絶対条件だ。とにかく速くならなければ。

しかし量にばかり意識がいったトレーニングは皮肉な結果を生んだ。大会前の5月、脚の疲労を押して走り続けた。激しい筋肉疲労を耐えることが自分を強くする。そう信じて走りつづけた。結果、両脚のハムストリングを痛めてしまう。オーバーユースによる炎症である。筋肉の痛みはスピードを出すと痛む状態が続いた。

だましまし走ることで調整し、WOCを走ることは出来た。しかしクラシカル予選は焦りもあってミスが多い不本意なレース、リレーでこそ良いレースをしたものの、自分のイメージしたWOCとはかけ離れた結果に終わった。

失望のうちに帰国した1999年の遠征。しかし帰国後、下降し始めたコンディションはさらに下っていってしまう。

### デフレスパイラル

大会後はリラックスする暇もない。10月にはパークワールドツアー（PWT）、2000年4月にワールドカップ富士大会が控えていた。特にWC2000は実力をホームテレンで試すことのできる絶好のチャンスである。帰国後8ヶ月であらためて自分をベストの状態に造りあげなければ。

ば。まずは怪我を完治すること。しかしトレーニングへの障害は怪我という内的要因だけではなかった。

この時期、仕事は入社して4年目を迎え、大きく短納期のプロジェクトに組み込まれた。間もなく今までにない多忙と精神的な重圧に課されるようになる。自分のコントロールできない仕事が洪水のように流れ、みるみるうちに飲み込まれてしまった。

追い討ちをかけるように私生活では、結婚して3年の妻に別居を言い渡される。

仕事・家庭・OL。自分の中でそれなりに区切りをつけていた3つが、一変に溢れ出し、お互いのスペースを主張して広がり混じり合った。自分でも收拾がつかず混乱するばかりであった。

すべてのクライマックスが集中した2000年、WC2000富士大会は何が何だかわからないうちに終わってしまった。当然ベストパフォーマンスを望むべくもなかった。

自分は何者だろう？選手なのか、会社員なのか？今まではすべてを両立していたつもりでいた。廻りもそのことに賛辞を送る。そういう自分にある種のカッコよさも感じていた。

しかし、実際はすべてが中途半端だったのではないかとたまたま表面うまくやっていたように見えていただけで、実はあちこちにひずみが生じていたのだ。

ワールドカップを終えた後、自分の中を整理する意味もあってオリエンテーリングを休養した。人生で2度目に長い休養となった。

### ライブニッツからの知らせ

引越しも終えて落ち着きを取り戻しつつあった盛夏、IOF総会からWOC2005愛知大会の朗報がメールで届いた。

自分の中での矛盾を解決できたわけではない。また同じ失敗を繰り返すかもしれない。だけど、このチャンスは2度と巡ってこない。

2005年までもう一度頑張ってみよう。深夜にパソコンの前で小さく思った。

（鹿島田浩二）